

蜀山人の狂歌が示す「夏」  
落語から学んだ雑学

にわにみず あたらしたみ いやすだれ すきやちぢみに いろじろのたぼ

(庭に水 新し畳 伊予すだれ 透綾縮に 色白の鬘)

太田蜀山人の狂歌で、「夏の暑さの中、ほんの一瞬ではあるが感じる事ができる清涼感」を現わした歌として、落語の枕にも数多く使われてきた。

真夏の夕方ラジオから流れてくる落語、枕を聴いていてこの狂歌が出てくると、もしかして今日のネタは「青菜」かなと想像したりしたものだった。

近頃はこの狂歌を引用しない人が増えてきたように感じる。言葉の意味がわからないし、生活文化が変わってしまい情景の説明がないと理解できないお客さんが増えてきたせいかもしれない。

●庭に水

打ち水をすると清涼感が出るとされて、真夏の夕方になり日も傾き始めると軒先や門前に打ち水をした。手桶に入った水を柄杓で撒く程度の水なので、よく考えて見ればそれほど著しく気温を下げるわけでもないのだが、得られる「涼感」に主眼を置いたものであったに違いない。

近頃は、酷暑の真っ盛りの時間帯に、アスファルトの道にホースで水をまき散らして、温度が下がるのだとはしゃいでいる人が多いが、少々趣が異なるような気がする。

●新し畳

新しい畳に入替えると、部屋全体が明るくなり、新婚の妻との暮らしが始まった日のような新鮮さや清涼さを感じるものだというのが本来の意味だったようだが、「女房と畳は新しい方が良い」と変形して広まったことにより、古女房への悪口になってしまったらしい。

「女房と味噌は古いほどよい」という対極にある言い伝えもあるようなので、物は言いやう使いやうということか。家の中を片付けて大掃除をして、畳を入替えて盆を迎えたということなのかもしれない。

●伊予すだれ

江戸で使われていた簾の素材としては、竹・蒲・葎などが多かったようだが、伊予竹を使ったものもあった。

それぞれ素材の特徴を活かしたもので、太さや形状などによりそれぞれの良さが示されていた。

伊予竹を使用した伊予簾は、宇津保物語・枕草子・源氏物語などにも出てくるのでかなり古くから存在する物のようである。適度な太さが適度な隙間を生み出して、流れる空気や視界のほどがよろしかったようである。

伊予国(愛媛県)上浮穴(かみうけな)郡の露峯(つゆのみね)という山に生える篠竹で作った。露峯という所は、松山市から南東へ40Km程入った久万高原の山中にある。

●透綾縮

着物に関する知識が全くないので、調べまくってみた。

「透綾」は、透けて見えるような綾織りの衣で、昔は縦系に絹糸、横系に苧麻(ちよま:カラムシ)を使用したらしい。夏の女性の着衣として使われた。

「縮」は、横系に強いねじりを加えた糸で織って自然な皺を創出した織物。

つまり「透綾」の「縮」は夏をしのぐ着物として考えられた逸品とすることができる。

落語「鈴ふり」の中に、「紺透綾を素肌に直に着た若い女性がお酌をしまわる・・・」という場面があるが、古今亭志生が語ると独特の表現力でさらっと伝わるのが面白い。

### ●色白の髷

「髷」は日本髪を結った時に襟足に膨らんで突き出した部分を言う。江戸では「たぼ」と言うが、上方では「つと」と言う。文字を分解してみると何となくその意味や成立ちが想像できる「鬘(まげ)」「鬘(びん)」「髷(たぼ)」。髷があるのは大人の女性の髪型で、稚児鬘などの少女の髪型には髷はない。そんなことから「たぼ」は大人の女性を総称して使うこともある表現だったらしい。

### ●青菜という落語

落語「青菜」の中には暑い夏ならではの光景や、江戸時代の大家の旦那と出入りの職人の人間関係などが描かれていて面白い。

大家の旦那が出入りの植木職人に勧めるお酒は「やなぎかげ」と称する「直し」、酒肴は「鯉のあらい」。

「直し」は、焼酎を味醂で割ったもので、井戸水で冷やして飲む夏の飲み物(酒)だった。

江戸では「直し」と言ったが上方では「柳蔭」と言った。味醂も元は焼酎だし、「直し」は今風に言えばカクテルなのかもしれない。

旦那は、「鯉のあらい」の次に「青菜」をご馳走しようとするのだが……。

この落語は上方落語で、原話は安永 7 年(1778 年)の「当世話」の中にあつた。三代目柳家小さんが江戸に移植した。当初は「弁慶」となっていたが、のちに「青菜」と言われるようになった。

上方落語版の「青菜」の方が話の展開に膨らみがあつて面白い感じがするが、枕に蜀山人の狂歌は出てこなかったような気がする。

### ●蜀山人の「もうひとつ」

冒頭に書いた狂歌の作者太田蜀山人は、この作の対極にある光景として、こんな狂歌も残している。

間口九尺・奥行二間の長屋での暮らしぶりが、目に浮かんでくる。

にしびさす くしゃくにけんに ふとっちょの せなでこがなく ままがこげつく  
(西日射す 九尺二間にふとっちょの 背中で子が泣く 飯が焦げ付く)

以上